

地域・資本・労働の多重スケールと重工業家族づくり

－ 大宇造船労働組合の労報を中心に

申賢娥(東亜大学校)

1. 初めに

1.1 研究目的及び背景

本研究は、1970年代半ばに嶺南地域に重化学工場が建設され、1980年代以降、国、地域、資本というスケールが重なって形成された産業都市の労働者の生活様式を、地域、労働、家族という問題枠を交差させて分析しようとする。特に1980年代以降に形成された重化学工業団地の労働者及び産業都市の住民生活を「重工業家族」及び「地域的な生活様式」に概念化しようとする。

したがって、この研究では2つの重要な問題意識を交差させる。一つは重工業家族研究と叙事的再現であり、二つ目は労働者の研究とローカリティである。まず、既存の労働文学研究において労働者の主体性に関する研究は主に行われてきたが、本研究では労働文学を「重工業家族」が再現されたテキストで再読しようとする。重化学工業団地を中心とする大工場の重工業の男性労働者が地域に落ち着き、継続的に再生産できるようにするために、国家と資本は「重工業家族」構築を通じてこれを統制しようとした。労働者らは資本が設定する「重工業家族」とは異なる「労働者家族」を構築しようとし、これを労働小説を通じて再読することで「男性労働者」だけでなく、労働者をめぐる様々な主体の生活様式を分析することができる。

また、男性労働者が公団地域に位置し、継続的に再生産されるように管理することが国と資本の重要な統制政策であったという点で、地域に関する研究は本質的に一緒に伴わなければならない。国と資本がどのように地域を産業基地に再配置し、生産領域と再生領域を区分したのか、そのような地域で生きていくことを重工業家族はどのように感覚して受け入れたかを見る必要がある。国家と資本によって生産工場であると同時に労働者を再生産できるように再配置された地域の構造は、その地域に位置して生きていく労働者家族の生活様式にも一定の制限を生み出す。重工業労働者の家族であり、産業都市住民として生きていかなければならない人々は、そのような地域構造が生み出す生活様式に従うか、または離れて生活の軌跡を作り出します。本研究では、地域という条件が生み出すそのような生活の様式を「地域的な生活の様式」に概念化し、重工業労働者家族の生活を究明するだろう。

1.2 研究の範囲と構成

本研究では、1987年以降、産業都市巨済の重工業労働者の生活様式を分析するための主なテキストとして、1988年から大宇造船労働組合で発刊した労報である「玉浦労報」(1990年以降「夜明けを開く彗星」と改称)を扱いたい。そして、比較対象としては1988年から大宇造船で発刊された社報である「希望 90's」と1990年以降に発刊された労働小説を扱う。特に労働組合の労報は、労働者たちが直接、文を書いて発刊したという点で重要だ。1987年前後の労働者の生活を扱った研究は、ほとんど「労働小説」を通して再現された労働者の生活を扱っている。しかし、労働者が自分たちの生活について発話しているテキストである労報はほとんど研究されていない。

2. 重工業家族と地域的生活様式

1970年代半ば、嶺南地域に各種の重化学工場が建設され、国家と地域と地域住民の生活の版図は完全に変わった。国家は「重工業時代」を宣言し、地域は「重工業」生産基地として再編され、住民は「重工業労働者」として再誕生することになる。この過程は90年代に「大宇家族」や「もう一つの家族、サムソン」のような「新経営戦略」を通じて企業-地域-家族を運命共同体に結びつける過程でもあった。また、これは単に「企業福祉」だけではなく、地域の空間的再編を通じて行われた。したがって、本稿では企業の家族づくりと地域の空間的再編、そしてそれに対応して労働者らが作る家族談論を分析しようとする。

軽工業の女性労働者の場合、「軽工業家族づくり」は行われず、「女性労働者は家庭に」返されたのとは異なり、男性「重工業労働者」は「重工業家族づくり」を通じて地域に位置して再生産するように配置された。

地域労働家族が重なった「重工業家族づくり」と「地域的な生活の様式構築」は決して断線的な方法で機能しなかった。資本が主導する家族づくりと地域的な生活様式と労働者が対抗的に作る家族づくりと地域的な生活の様式は重なるとして重なることもあり、時には拮抗しながら様々な地域的生活の様式を鑄造してきた。

そこで本章では、「重工業家族づくり」と「地域的な生活様式構築」がどのように互いに拮抗し、重なり合い、対立するのかが叙事的にどのように再現されるかを分析し、「重工業中産階級」「エリートエンジニア」または「地域の土方労働者」で表されることを越えてどのように労働者が生活の様式を構築していったのか総合的に把握したい。

本研究で重要に接近しようとする最初の研究観点は、「重工業家族」を扱うことにおいて、「産業研究」を超えて主体化される叙事を分析することにある。80年代以降、労働者の叙事を分析することは、現在「産業研究」と「文学研究」が完全に分離された側面が強い。「産業研究」は主に重工業という「産業」に焦点を当て、1970年代に始まった「重工業時代」が1990年代以降復興し、2010年代以降に没落するまでどのような産業的な効果が創出されたかを分析する。そして「文学研究」は主に「労働文学」を中心に、1980年代の文学場を分析することに焦点を合わせてきた。本研究では「産業研究」を超えて労働者と家族がどのように主体化されるかを分析しようとする。

これを扱いながら「労働者主体化」ではなく「重工業家族」という概念を通じて接近するという点は特に重要だ。既存の「労働者主体化」を扱う叙事は、男性労働者の「意識化」と「労働の主体」としての覚醒を扱う側面が強かった。これは結局、1990年代以降「意識化」された「先進労働者」が資本の包摂に「転向」して「重工業中産層」になったという叙事に帰結するしかない。したがって、本研究では「重工業家族」を概念を中心に置く。これは「男性重工業労働者」だけでなく、「中化学工業団地」という地域で生活している労働者、労働者の妻、子供、労働者ではない住民など、地域的な生活様式を網羅して扱うためのアプローチだ。

3. 企業を中心とした家父長的家族

「重工業家族」と「地域的生活の様式」を生み出した重要な軸は国家と資本だ。特に資本は87年の大闘争以来、もはや抑圧的な軍隊式規律だけで労働者を統制できないことを悟り、「企業家族づくり」

を通じて労働者を統制し管理しようとする。特に大宇造船の新経営戦略である「希望 90's」は、最も「成功的」に労組を弱化させたという評価を受けた。1989年8月16日に発刊された「玉浦労報」第25号の「全社的組織改編」という記事では、「会長の強力な意志が隠れていると分析」され、「現場との頻繁な接触を通じて家族的な会社雰囲気の造成、密着管理による労務管理の効率化」を図ると評価された。そして1990年02月28日に発刊された「夜明けを開く彗星」第30号の「会社の政策をどう見るのか」という文には、89年8月から40余回にわたって「ファミリートレーニング」を行ったと伝えられる。また、90年2月からは社員の妻を対象に教養講座を実施した。このような「ファミリー教育」は、労働者と労働者の家族が企業を中心に「一つになる」体験をすることが重要だった。特に90年に4泊5日間実施された「ファミリー教育」は「空から五色パラシュートに乗って降りてきて」代行進をすることから始まり、最後の夜には「10人、50人、100人、200人こんなに丸く丸く」手をつないで一つになって回り、点火式をして「歓声が一つの力として」集まり、模範労働者の海外産業視察と主婦を対象とした教養教育で「労働者」と「主婦」の「本分」を目覚めさせる方式で行われた。海外視察、教養教育及びスpekタクルな行事を通した「一つになること」と「胸がいっぱいになること」の体験を通じて「企業家族づくり」を実施したのだ。

このような「企業家族づくり」は、一方で「会長」を「父」とする家父長的家族形態でもある。1990年1月に発刊された「夜明けを開く彗星」第29号の「おしゃべりコーナー」で、「朴所長」はまた、闘争する労働者に「息子が父親に小遣いをもらうには肩も揉んであげ、こびも売らなければならない」と一言言った。

4. 民主労組を中心とする重工業家族

労働者の家族をどのように管理するかは、労働者の立場でも当面の課題だった。労組運営方向の中で重要な事業として物価の高い巨済で家計負担を減らすための消費組合建立と社員賃貸マンション管理があり、その他にも「不遇な組合員」支援、合同結婚式、未婚組合員合コン、夏季休養所運営を進め、調査統計部では、家庭、生活、住居環境に対する統計調査を実施した。そして労報にも労働者の家族たちの事情を載せ、「家族と一緒に見る労報」と感じるよう要請した。

そして労働組合を結成したという理由で87年に解職されたが、90年1月に復職したペク・スンファンは、インタビューで「久しぶりに家に帰ってきたように和やかで暖かい気分」であり、同志たちを「現場で会ってみると本当に親兄弟のように感じる」と明らかにした。労働者は解職された組合員や不遇な組合員などを支援し、「連帯」することを通して「労働者家族」を作ろうとしたのだ。

また、重工業労働者の家族を結んでくれるのは、まさに「家族賃金」だった。重工業労働者の賃金引き上げ要求に地域住民たちは「過剰賃金引き上げ要求」だとしたが、労働者が勝ち取らなければならないのは「一人分」の賃金ではなく「家族賃金」だった。「主婦教養教室」などを通じて企業は主婦も「労働者の再生産」のために管理し、労働者の子どもたちは労働者になる地域の構造に置かれるようになったため、労働者たちはそれなら自分の労働は一人分の賃金ではなく少なくとも4人分でないといけないと要求したのだ。

参考文献

<자료>

대우조선 노동조합, 옥포 노보/새벽을 여는 합성, 1988~1996.

성공회대학교 노동사연구소 편, 한국 노동사 자료총서: 노조사업 및 활동 <4>- 노보, 소식지, 한국학술정보, 2014.

<논저>

구해근, 한국 노동계급의 형성, 창작과비평사, 2002

김원정, 「젠더 관점에서 본 한국 기업의 가족친화정책」, 서울대학교 박사학위논문, 2018

김준, 「잃어버린 공동체?-울산 동구지역 노동자 주거공동체의 형성과 해체」, 경제와 사회 제 68 권, 비판사회학회, 2005;

——, 「경합하는 정체성, 남성성, 그리고 계급」, 산업노동연구 제 16 호 1 권, 산업노동연구, 2010.

노병직, 「한국조선산업에서의 기업별노사관계시스템의 변환」, 『노사관계연구』 제 13 권, 2010

박종기, 「사보 이용이 사내 커뮤니케이션에 미치는 영향에 관한 연구-대우조선해양(주)의 사보 “해오름터”를 중심으로」, 부경대학교 신문방송학과 석사학위논문, 2010

박희, 「한국 대기업을의 조직 관리와 노사 관계에 관한 연구: 가족주의의 영향을 중심으로」, 연세대학교 사회학과 박사학위논문, 2010

신원철, 「경쟁 양식과 노동자 정체성-1960~70년대 기계산업 노동자를 중심으로」, 경제와사회 제 61 권, 비판사회학회, 2004

신현아, 「1980년대 중공업 가족의 형성과 지역적 삶의 반경」, 동악어문학회 제 79 권, 2019

——, 「경합하는 노동자의 언어들」, 인문과학 제 83 권, 성균관대학교 인문학연구원, 2021

양승훈, 중공업 가족의 유토피아-산업도시 거제, 빛과 그림자, 오월의봄, 2019, 168 쪽.

우정석, 「단일산업에 의한 지역경제의 경로의존성과 잠김효과: 경상남도 거제시 조선산업을 사례로」, 동국대학교 지리학과 석사학위논문, 2019

원영미, 「1980년대 울산 대공장 노동자 연구- 현대자동차와 현대중공업을 중심으로」, 울산대학교 역사문화학과 박사학위논문, 2015

유형근, 「한국 노동계급의 형성과 변형-울산지역 대기업 노동자를 중심으로, 1987-2010」, 서울대학교 사회학과 박사학위논문, 2012

이재선, 「신경영전략과 기업문화운동의 사례연구」, 경남대학교 교육대학원 석사학위논문, 1995.

이재인 「노동자 정체성과 결혼생활의식」, 가족과문화, 제 17 권 1 호, 한국가족학회, 2005

이주영, 「한국의 국토 계획과 지역 과학 이론」, 서울대학교 석사학위논문, 2015.

이현, 노동건강연대, 2146, 529, 온다프레스, 2022.

조주은, □현대가족 이야기□, 이가서, 2004.

팽경인, 「노동자가족의 노동력재생산방식에 대한 사례연구: 제조업 생산직 노동자 가족에서 여성의 역할을 중심으로」, 이화여자대학교 석사학위논문, 1987

허은, 「노동계급 가구와 지역노동시장-마산·창원지역 구조조정과 여성 노동 유연화」, 서울대학교 사회학과 박사학위 논문, 2016

홍원표, 「조선산업 노동통제와 노동자 정체성에 관한 연구-A 조선 사례를 중심으로」, 연세대학교 사회학과 석사학위논문, 2001

(翻訳責任者: 関一美)